

特集 育てる会の自然体験

私たちは育てる会は60年余りに渡って、子どもたちに自然体験の場を提供してきました。その原点は、自然と子どもの本質的なふれあいと対話の場を造り上げることにより、個性特性に合わせた体験の蓄積をねらうものです。

時代の変化とともに、社会のあり方や体験活動に求められる役割、子どもたちや保護者の価値観も変わってきています。そうした変化を受け止めながら、私たちも時代にふさわしい体験活動を模索し実践を重ねてきました。

一方で、どれほど時代が移り変わっても、活動の根底にある考え方や物事の捉え方は、揺らぐことのない大切な価値であると考えています。

本特集では、育てる会が大切にしてきた自然体験とは何か、その原点と方向性について、いくつかの寄稿を通して振り返ります。当時の時代背景や社会状況を反映した内容もありますので、すべてが現在にそのまま当てはまるわけではありませんが、育てる会の自然体験の根底にある思いや考え方を感じていただければ幸いです。

●出典：『育てる』通巻280号 平成3（1991）年11月25日発行

「もっと自然との触れ合いを」

青木 孝安（育てる会理事長）

去年の夏休み、私どもの施設で幼児と母親の合宿と野外

活動を実施した。一日、私は幼児と母親を連れ、ジャガイモ掘りに出かけた。

ところが、いよいよモを掘る段になって気が付いたことは、何人かの母親が手袋を着用していたり、また手袋がない母子はビニールの小袋を手にかぶせ、手首を輪ゴムで止

めていた。手が土で汚れるのが嫌だからということらしい。

私は少々どころか、かなり落胆すると同時に、この活動の目的の事前指導の不徹底さを反省した。

そもそも、この活動の目的は、イモ掘りという活動を通して、肌で土に触れることをねらったものである。そのために、スコップやクワなどは使わず、素手でイモを掘るように計画したのである。

素手を土の中に入れることによつて、イモが育った土のやわらかさ、ぬくもり、香りを全身で感じとつてほしいと願ったのである。

こうした、全身で自然と触れ合うという体験は、近年、都市化社会の家庭には、ますます少なくなつてきている。

夏の一夜、子どもたちを連れて星の観察に出かけた。星の観察という活動であつたが、その活動の中で、ある子は夜気のすがすがしき、夜空の神秘を感じ、ある子は初めてホタルを見たり、草の葉に夜露が付いているのを知った。またある子は、星空の美しさや、星座の位置の季節による変化を知った。

自然というものは、それぞれの子どもの好みに合った情報を、豊富に提供してくれるものだ。長年、子どもたちと大自然の中での活動を続けてきたが、自然というものは、膨大な情報を内蔵していると思ふ。

この自然が提供してくれる情報は、都市社会における情報のように、こちらの都合など考えずに押し入ってくるようなことはない。人がその気になつて、自分で動き、見れば、その人の個性、特性に合わせて、豊富な情報を提供してくれるのが自然である。どのように感じ、どのようなことを知るのも自由なのである。まさに、自然の情報は実に寛容であり、個人尊重であり、しかも評価がないのである。

私もが行っている山村留学制度の施設には、長期間親元を離れ、大自然の中でさまざまな自然体験をしている子どもたちがいるが、その子どもたちが日増しに子どもらしさと、活力を取り戻していくのを見るにつけ、私は、この自然の情報と子どもとの関わりを見るのがすわけにはいかないのである。

どうも、われわれ農耕民族の血の中には、四季の自然の摂理が、長年にわたつて遺伝因子として培われてきたように思う。この因子が自然の情報と触れ合うことにより、その人間の中に、人間として生来宿している「生きる力」を蘇生させると思ふのである。

私たち大人は、子どもたちを自然の中へ連れ出す場合、この考えを常に心の片隅に留め置きたい。

自然と子どもをできるだけ近付けてやり、その間に、何人も何物も介在しない機会をつくつてやるのだ。

夏になると、多くの家庭が夏の自然を求めて、郷里や観光地に出かけるであろう。より整った施設で快適にすごしたいと願うのが人の常である。それはそれでよいが、ときには暑い日差しの中で夏野菜を収穫することを、冷たい清流に足を踏み入れて生き物を探すことを、満天の星空を眺めながら静寂の森に耳をすませてみることを、また農山村の人々のくらしを全身で体験してみることが、ぜひ取り入れてほしいと思うのである。もし最愛の子どもを同行するならば、その子のために夏の自然との対話の場を設けてやってみよう。

自然は、そういう子どもを待っているのだ。

●出典：『育てる』通巻224号 昭和62（1987）年2月25日発行

「子どもから自然を奪うもの」

—— 文明論的な反省から ——

柴田 敏隆（ナチュラリスト）

自然は野蚕で不潔で田舎くさいか？

高度経済成長が急激に抬頭した頃、消費は美德、お客様は神様、大きいことは良いこと、などといわれた風潮の中で育った人たちが、今、母親となっている。これらの若い

お母さんたちの間に、自然は危険で、不潔で、野蚕で、田舎くさいという認識が、かなり根強く浸透しているようだ。

科学技術を駆使して、自然排他的に構築された都市空間の、行き届いた管理の下で、便益さに馴れ、対応の安易さに溺れ、能力の劣化をもたらしながら、それを自覚できない。暖衣飽食のかけりから生じる肥満や不健康、それに日常のストレスから逃れようと、スポーツや慰楽に我を忘れるようにする。

客観的に見れば、人間らしさに欠ける生き様ではないかと思われるのに、本人たちは一向にそういう自覚がない。そのような意識構造の中で、自然はスポイルされ、その消滅や破壊に対して無感覚になっていく。

その無自覚が、自然は、危険で不潔で野蚕で田舎くさいと決めつける差別思想を生むのである。

危険ならば都会にもある。発癌物質で汚染された大気を吸わされ、水を飲まされる都市環境が、清潔だと言い切れるであろうか。

まちがった人間至上主義

誰しもが、健康で安全で快適で幸福な生活を送りたいと願望するのは人情の常である。しかし、その欲望の度が過

きて、エゴイズムに陥ると良くない。

個人のエゴは地域エゴを生み、それが国家エゴを生むようになると、力の強い方が、弱い方の犠牲の上に、幸福や快楽を享受するようになる。その過程で、自然と野生の生きものにまでとばっちりが及んで、自然は破壊され荒廃し、疎外されていく。

こうした近代文明に共通するパターンは、西欧にその端を発している。そして、この文明を支えるバックボーンはヒューマニズム（人本主義）である。

中世に墮落した宗教のアンチテーゼとして生まれたこの考え方は、人間は自然に君臨し、これを支配できるものという、一元論的価値観をもち、それで世界を席捲し、結果的に差別と植民地支配を生んだ。

この人間至上主義は、それ故に人々の至福と便益を飽くことなく追求して、今日、都市文明の花を開いたが、反面、公害、ストレス、幼衰、資源涸渇を生み、核戦争の危機さえ招来している。とりわけ、子どもたちは、その悪影響をともに受けているのである。

地球が「運命共同体としての宇宙船地球号」と目されるようになった今、人間至上の価値観は、生態学的平衡を破る危険を多分に孕むものと、強く反省しなければなるまい。地球の上に生きとし生けるもの、原則的には、共存共

栄、互譲互恵といった、東洋や多くの狩猟文化に共通する調和と節度を持った価値観や自然観に回帰しなければならぬと思う。

人は、誰しもが死を恐れるのが本能としてある。

この死への恐怖と、人間至上主義の中にひそむエゴとが、死にたくない、人は死んではいけない、という形にエスカレートすると、不慮の人死があつた場合、こんなことが二度とあつてはいけない、と思うようになる（本当は、二度あることは三度ある、だから自分でも注意しよう、という自律克己への指向がなければいけない）。その為には、原因を究明して……となると、人為の及ぶ範囲について管理責任が問われるようになる。

人間一人の生命は地球より重い、とするヒューマニズムは、観念として大変結構であるが、そのために過大な責任が問われ、膨大な賠償責任が課せられると、誰もがそれを恐れて、いきおい原因排除に走るのは当然であろう。しかし、それが、子どもの大切な芽生えを無惨に摘み取ることへの配慮は、今迄、ほとんど省みられなかった。

交通安全教育が示唆するもの

危険に対しては、異常なまでの原因排除に汲々とする

一面に、どうしても排除できない危険の要素がある。その典型は自動車である。この丸い四本足を持つ人工の猛獣は、毎年九千人以上の日本人を殺しているのに、誰もこれを退治しようとはしない。

北海道のヒグマが、年平均一・五人、南西諸島のハブもほぼ同じ位の致命率なのに、人々は必死にその撲滅を策しているのである。客観的に見たら異常なほどの一方的対応である。

しかし、自動車が凶悪であるからといって、これを原因排除していたら、現代の社会機構は麻痺してしまうことも明らかである。原因排除はあきらめざるを得ない。そこで人々が取った対応策は、交通安全教育である。学校に交通係の警官が来て、学童に直接教える。ダミイを用いて交通事故を模擬的に再演したり、映画、紙芝居などあらゆる手段に訴えて、執拗なまでに熱心に、子どもたちを教育する。

自然が危険だというならば、（自然が子どもにとつて不可欠な存在であり、それへの触れ合いが振興されなければいけない、というのならば）何故に、交通安全に注ぎただけの、安全教育への努力をしないのか、危険であればあるほど、教育的意義は高いことを教育者はクールに認識すべきである。

いわゆるレクリエーションリーダーについて

野外レクリエーションで大活躍するレクリエーションリーダーと呼ばれる人々がいる。講座をとり講習を受け、資格認定される一種の職能であるが、このレクリ（と略称する）の三種の神器が、ゲーム、ソング、ダンスである。そして、これが野外レクリとなると、夜のキャンプファイアーが追加される。私は今迄、機会ある毎に論じてきたが、これらは何れも、本質的には自然と関わりのない行為である。

毎年夏、キャンプ場で行われる多くの子どもキャンプで、鳥が歌おうが、花が咲こうが目もくれず、ひたすらジャンケンポイ・アツチムイテホイ式の他愛ないゲームに熱中しているのを見ると、何のために自然の中にいるのか、自然の中で何をすべきかの本質が欠落しているのではないかと、思わずにいられない。

人は快適な環境の中で、したいと思うことをしたが、という。だからすばらしい自然の中で、歌いたい人が、自然発生的に歌うことに私も原則的に異論はない。但し、それは、自然を損ねたり、野生をおびやかしたり、他の訪問者に迷惑をかけない、というモラルの下に容認されることである。

レクリの人々は、子どもたちに対してにこやかに話しかける。巧みに集団操作をし、総じて喧噪で傍若無人である。ここにも子どもたちの自律的思索が著しく欠落している。

最近、アメリカやカナダで、レクリエーション学やレジャー学を専攻した学者が日本に帰ってきて、異口同音に、日本の野外活動が四〇年位遅れていると指摘している。あちらさんの、今の主流は、Nature Study（自然観察学習）と Environment Education（環境教育）にあるという。

野外活動がスポーツ振興法の中に組み込まれているので、体育系の大学で指導者が養成される。体育系だと、得てして自然史や民俗、歴史への視点が欠けてしまったり、笛を吹いて、イッチニ―サン式になつてしまいがちであったりする。これも、自然がありながら、自然の中に入りながら、子どもを自然から遠ざけてしまう要因のひとつであろう。

良い子指向の親たち

最近、保護者が子どもの遊びに介入してきて、保護者の目線で価値がはかられ、ことが律せられる傾向が強くなった。その典型が「良い子」の画餅を描いて、これを押

しつけることである。

この感覚が、いわゆる都会的センスなるものと融合して、自然を子どもから隔離していることのマイナスを、当の保護者がほとんど気付いていない。

服が汚れる、帰りが遅い、怪我するかもしれない、遠く（目の届かない所）へ行つてしまう、だから……といった保護者目線的な危惧が、結果的には子どもをうるさいほどに制約する。最近、ボイススカウトにも、こういった保護者が介入してきて、野蛮だの危険だのと容喙するので弱っている、という話を聞くが、いかにもさもありなんと思う。

今、子どもたちから自然を奪っている最大の元凶は、日本の現代社会の持つ徹底的な管理体制と、それに基づく事なかれ主義ではないだろうか。いずれにせよ、可哀想で不幸なのは子どもである。



●出典：『育てる』通巻324号 平成7（1995）年7月25日発行

「育てる会のキャンプの原点を考える」

山本 光則（育てる会関西事務局）

育てる会の野外活動のそもそもの始まりは昭和四十三年のことであった。今から二十七年も前のことである。

本会の青木理事長は三十八才の若さで教職を辞し、その当時は受験戦争がエスカレートする前ぶれの頃で、世間がそれほど自然体験教育の重要性に気付いていなかった時代に、敢えて自然体験の重要性を訴え、賛同する教師や親と手を携え、育てる会を創設し、青少年を自然の中に放り込んだのである。

そのころの活動の様子は、本誌『育てる』の創刊号から六〇号にかけて詳細に記録されている。創設期の本誌は現在では保存用として本部事務局に大切に保管されている。和文タイプで印刷され、ザラザラの色紙に「育てる」という文字が浮かんだ表紙を開くと、写真やイラストはなく、大きめの活字が無造作に並べられ、これでもかこれでもかと活字が迫ってきて読もうとする意欲を減退させるシロモノである。

しかし、見た目の体裁とは異なり、大きな文字を目で追いかけてみると、一字一句に情熱がほとばしり、自然体験

教育にかける執念が伝わってくる。育てる会の野外活動の理念が切々と訴えられているのである。

昭和五十一年春、縁あって私は育てる会に就職し、子どもたちと長野県の山村や東京近郊の海や山で、毎日のように楽しく遊んだ。はじめは、ただ自分が少年期に体験した遊びを子どもたちに押し付けているだけで、育てる会の趣旨についても、青少年の野外活動のあり方や理念についても、よくは知らなかった。

そんな自分にとって育てる会創設期の『育てる』誌は、優れた教師であり参考書であった。暇さえあれば、本部のスチールロッカーに保管されている本誌を読みあさった。

そんなある日のこと、「育てる会の野外活動の原点をもう一度考えよう」という文字が目飛び込んできた。育てる会が長野県で夏休みの自然体験活動を実施して三、四年が経過した頃に発行されたものだった。

現在では、育てる会育ちのリーダーが社会人や学生となり野外活動のリーダー組織を支えているが、その頃は学校の先生がリーダー役を担っていたのである。

この育てる誌に書いてあったことを要約すると次のようになる。「自然の中に子どもたちを連れ出すまではよかったが、教師が先頭になり子どもたちに指示を出し、スケ

ジュールをぎつしりと詰め込み、安全を重視し、大人が考えた活動を無理やり子どもたちに押し付け、至れり尽くせりの配慮をし過ぎていたのではないか」「育てる会は、子どもが自分の意志で意欲的に動くようにするのをそつと見守り援助することが目的ではなかったか。大人たちはどのような役割を果たすべきか」という反省と次のような指導者への方針が示された。

「大人は子どもの前に立つのではなく後ろで見守る」「時間で追い立てることなく子どもの自主性を重んじやりたい活動をやらせる」「子どもが求める結果を大人が安易に与えてしまうのではなく子ども自身が工夫と努力により結果が得られるように手助けをする」「自然体験をリクリエーション的な発想で捉えるのではなく、自然と子どもをできるだけ近付けて、何物も介在しない機会をつくり、自然との対話の場を設ける努力をして欲しい」

これを読んだ私は、ただ漠然と「子どもを自然の中に放り出して楽しく遊ばせればいい」という程度の認識でしかなかったことに恥ずかしさを感じたのであった。

さっそく、育てる会の原点の活動を実践するのだと意気込み、夏行事の開始日は、村の入り口の峠からセンターまで六キロの道を荷物を背負わせ、あちらこちらぶらぶら遊ばせながら歩かせた。

飯ごう炊さんでは、苦勞すればするほど喜びが大きいのだと、手出しせず子どもたちに任せた。昼ご飯が夕方近くにできあがることかしばしばであった。

その頃の活動は、魚釣りを希望すれば弁当を持っていづもの集落を越え、川まで八キロの道でも歩いて出かけた。センター周辺の山や谷をさまよい歩き自然の中から新しい発見の連続であった。

収獲間近なトウモロコシ畑にムジナが深夜寝静まっている時間に現れ、翌日のおやつにしようとしていたトウモロコシを食べてしまい、これに憤慨した子どもたちと、畑に TENT を張り、帰る日まで交代で見張り番をしたこともあった。(実際子どもたちは、日中の活動で疲れ果ててぐっすり眠ってしまうのだが。)

昨年の秋のことだ。八坂のセンターにお手伝いに行った時、かつて子どもの頃に活動に参加した A 君が遊びにきた。彼はもう社会人になっている。「育てる会の活動も変わりましたね。いろいろな野外活動の備品も揃って、車であちこち出かけ活動の種類も多くなり、幅広くなっているで驚いています。今の子は恵まれていますね。僕たちの頃は、毎日歩いてばかりで探検ごつこのようなことばかりやっていましたよ」と彼が言う。

「そうだね。ちよつと可哀想だった。最近では小さい子が多くなつて激しい活動ができないんだよ。それに、歩け、歩け、自分でやりたいことを考えろでは、誰も参加しなくなつちやう時代なんだよ」と私。

「いつだったか、暑い日に山に入り込んで水がなくてみんなぜーぜー言つてへばつていたら、突然山本先生が藪の中に飛び込んで行つたから、みんな暑さで発狂したんじゃないかと心配したんです。すると水の流れる音がするから行つてみたらやつぱりあつたぞと戻つてきて、みんな助かつたと喜んだことがありますよ。」

「そんなことあつたかな。」

「仲間が集まればそんな話題ばかりですよ。リヤカーに荷物と水を積んで山のてっぺんでテントを張り飯を作つたこともありましたよ。坂道を登るのがつらくてつらくて。」

「今じゃそんなことやる子はいないよ。」

「そんなことありませんよ。あんなに楽しくて、苦しいことは絶対体験させるべきですよ。最近の活動はちよつと過保護じゃないですか。」

確にかかつての育てる会の活動に参加していた彼らは、低学年であっても強かつたのでかなり思い切つたことができた。今の子どもたちは十〜十五年前の子どもたちに比べ

ると、体力、活力、精神力が確かに弱くなつており、同じような活動を設定することは困難かもしれない。

しかし、最近の野外活動を見ると、やや過保護ではないかと思うことがしばしばである。子どもたちが望む楽しい成果を与えることを優先し、短期間に数多くのメニューを与え、体験の質の追求をおろそかにしているように思えるのである。また、便利な野外活動用品や機材など多用し人間と自然の間にモノを介在させ、本来のねらいであるありのままの人間と自然との対話が忘れられがちになつてきているような気がする。

私自身もまた、最近では現代つ子の特性に合わせた活動プランを描くようになってきている。「自分の足で歩き自分の肌で体感させる」ことから、楽しい経験を数多く味わせたい、そのためには、ちよつと移動距離があると車の輸送を考え、イカダを作るのに時間がかかると他の活動がおろそかになるので、ゴムボートを谷川に浮かべ、子どもたちがはしゃぐ姿を眺め満足しているのだ。

飯ごう炊きさんも、じつと待つ姿勢がなくなつてきた。粘り強くやり遂げる子どもも少なくなつてきてずつと放つておくとごはんが食べられず、苦しく悲しいキャンプになつてしまうという現実があるから大人がつい手を出してしまうのであるが――。

子どもたちの野外活動も時代とともに変わりゆくことはいたしかたないことである。今の子どもたちが興味を持つモノを利用した活動もいいと思う。しかし、大人が過保護になつて楽しい結果を与え続けるということは決して良いことではない。たとえ野外活動の方法が時代とともに変わったとしても、子ども一人一人の可能性を伸ばすという基本理念は変わつてはならないものである。

もうすぐ夏休みである。私も七月の終わってから八月の終わりまで大勢の子どもたちと自然の中で過ごす予定である。育てる会の初心に帰つて、子どもたちとともに、ホノモノの自然体験を味わつてみたいと思う。

●出典：「育てる」通巻503号 平成22（2010）年6月25日発行

「育てる会と出会ったころの八坂の行事」

平野 悟（社会福祉法人職員）

青木理事長が担当リーダー

私が最初に「育てる会」に参加したのは、今から三十数年前、小学4年生の夏の短期山村留学（当時は行事といつていた）でした。2歳下の弟と、東京の杉並の学校からバスで八坂に行きました。高速道路の開通していない区間も

多く、とても長い旅でした。（翌年からは電車となりました。）

八坂は、東京育ちの私にとつて、まったく違う世界に映りました。家が点在していること、かやぶき屋根、いろいろ、生水が飲める……。それ以外にも「○番○番」とコールする有線電話や、音の割れたドナウ川のさざなみのテーマにはじまる毎朝の有線放送、道端に立つ火の見やぐらの半鐘にも驚きました。

まだ野外活動センターはできておらず、開村式の後、直接農家に行きました。担当リーダーは青木先生（現理事長）で、集落中心の本部になつていた農家にいらつしやることが多く、食事の度に呼びに行きました。現在、小学校教諭をしている時川さんに会ったのもこの時でした。

親元を離れて宿泊するのは、親戚の家を除いて初めてのことでした。さびしく感じる瞬間もありましたが、広い八坂のフィールドの中で体を動かし、都会では体験のできない自然や、農家の仕事に楽しさを感じました。一年間の長期山村留学はしなかったものの、それ以来、夏・冬・春の短期行事に参加しました。

センターができてからは、山村班の初日と最終日がセンター泊になりました。参加人数も増えて、八坂の村内どこに行つても、育てる会の緑の帽子を見るほどになりました。

朝は、集落ごとに集まってラジオ体操をし、その日どこに行けば何ができるかが伝えられました。女犬原では地バチとりや古代住居作り、金熊川では釣りや化石とり、公民館集合で村内巡りなどなど。冬だと、竹スキー作り、うさぎ狩りもありました。夏、夕食後に鷹狩山に登ったこともありました。眼下に広がる大町や大糸線の電車の光にうつとりしたものです。今だから言えますが、村内巡りをし、温泉に入り、リーダーがアイスを買ってくれたこともありました。どこにも行かず農家で一日竹細工をして過ごす日もありました。これがまたゆつたりとした素敵な時間でした。

行事中の行動は自分で計画

また、全員に八坂の地図（初めの頃は手書きガリ版わら半紙。その後、旧道の書かれた地形図）が渡されていて、自分でその日の行動を計画することも大いに許されていました。というより、それが基本でした。注意されたのは、個人行動をしないことと、マムシとハチに注意することぐらいでした。

北は女犬原（徒歩30分）、西は山岳博物館（徒歩90分）、東は大峰牧場（徒歩120分）、東は城山（徒歩60分）ぐ

らいまで、八坂のほぼ西半分を範囲に行動していました。移動手段はもちろん徒歩が基本ですが、軽トラックがまだ普及していない頃ですので、農家の人は誰しも畑や田んぼまで台車付きのトラクターで移動していました。当時の参加者が「トラクターは八坂のタクシー」と作文に書いていましたが、まさにその通りで、トラクターのエンジンの音が近付くと、乗っている人が声を掛けてくれるのを期待しながら、乗りたそうな、そうでなさそうな雰囲気をかもし出しながら歩きました。トラクターのスピードですからさほど速くはありませんが、それでも声を掛けられて、乗せてもらえたときは大喜びでした。今のうちに、事故がおきたらどうするなどという心配は、運転する方も乗る方も考えず、ただただ思いやりの心や楽しさいっぱいで行動していました。

様々な体験をし、自分の「いなか」になった八坂

私が山村班に参加する度にやっていたことに、わらざくり作りと風呂焚きがありました。これも、いつどこで体験できるかは、朝の会で知らされていましたので、自分の泊まった以外の農家へも行つて体験しました。一本一本のわらが、ぞうりの形になることに、不思議ささえ感じました。

風呂焚きは、それほど人気はありませんでしたが、自宅では絶対できない「合法的火遊び」に、私も燃えました！

また、東京でも、下水道の普及が遅れた自宅周辺地域では汲み取り式便所でしたので、あまり抵抗はなかったはずでしたが、八坂の古い農家はその数段上をいつていました。小便器は玄関の入り口の外にあり、個室は縁側をずーっと歩いて家の端にあるというのが、一般的な農家の造りです。お腹がゆるく、夜中にだいたい色の小さな白熱電球しかない個室に行くというのは、けっこうな恐怖でした。が、さらに終えて縁側から降るような星空を見たとき、そのあまりの美しさにまた驚き、恐れを感じました。

行事の参加は、母親が朝日新聞の小さな募集記事を切り抜いて話してくれたのがきっかけでした。同級生が夏休みの宿題で提出する絵日記などに書いてある「いなかにつてきました」の「いなか」という言葉が実感できなかった、両親ともに東京出身の私にとつて、まさに八坂は自分の「いなか」になったのでした。

塩とサバ系にのめりこみ、親になってもまだまだ……

その後、週末に行うミニ行事（三浦半島、人里の家など）、10周年記念行事の「八坂まで100km歩く班」、桑

梨集落での「いろいろ農家独立生活班」に参加しました。

「塩（の道）系」「サバ（イバル）系」の行事にのめりこんでいました。現在のボランティア組織「山波会」にもだいいお世話になりました。妻とはここで出会いました。子どもが産まれる頃まではリーダーを続けていましたが、今は子どもとファミリー班に参加して、自分が子どもの頃楽しかった体験を追体験しながら、子どもに伝えていくところで。結局私自身は、子どもの頃と今とやっていることが、まったく変わっていないことになります。

育てる会や、行事を通じて尋ねた八坂、売木、糸魚川、白馬、小谷、大町などのお付きあい、そしてそこで知り合った人々とお付きあいは、まだまだずっと続きそうです。

